# 日本粉ミルク事件は延々50数年

たくさんの日本人は、現在たくさんの中国人のような、毒粉ミルクによる辛い目に遭われ、苦しまれていた。53年は過ぎて、当時の被害児はほとんど中年に入った。だが、毒粉ミルクに対して辛い思いでが、なかなか忘れられない。
「中国の粉ミルク事件をみて、被害者らはとても辛いかなあ、と思う。子供らは、これからわれわれのような道を歩むのではないか。」
10月7日、大阪駅付近の喫茶店で、53年前の森永ヒ素粉ミルク事件の被害者である天野美奈子さんは記者に対して語った。話しながら、天野さんは席から立ち、長いドレスを少し上にして、踵あたりの赤い湿疹のような部分が見えてくる。「ヒ素粉ミルクを飲んだ後、このような後遺症みたいなものにずっと悩まされた。粉ミルクは私の人生が変えられた。」
1955年8月24日、日本有名な乳業大手森永は、1955年に生産した粉ミルクには、ミルクの質を安定させる添加物を入れた。この添加物は工業廃棄物で、一定の化学過程を経て、ヒ素化合物が生まれた。
2007年まで、被害者はすでに13426人に達し、事件発生1年以内に、合計130人の赤ちゃんは命を失った。

**満月の赤ちゃん：ヒ素粉ミルクを飲んだら、全身真っ黒になった**
1955年1月に生まれた小畑芳三は7人兄弟の末っ子。生まれた後、母親は母乳が足りなかったので、森永粉ミルクを買って飲ませた。「母親は後から教えてくれたことは、私はそのミルクを飲んで、すぐ吐いた。また、全身真っ黒の症状が出た。吐きと下痢は伴った。」当時は、日本は食料不足で、赤ちゃんは食べられるのは粉ミルク以外は、ほとんどなかった。8か月になるまで、小畑芳三はずっと森永ミルクを飲み続けていた。
「そのごろ、両親は私を病院に連れられ、検査を受けた。でも、当時の医者さんはヒ素ミルクを飲んだせいだと、もちろんわからなかった。夏バテとか風邪だと言われ、薬を飲んでいたが、なかなか治れなかった。」
数か月の赤ちゃんは話があまりできないが、泣くことができる。徹夜で泣き続くことは小畑芳三が苦痛を表す唯一な方法だった。森永を信頼していたため、両親はミルクには問題があると疑わなかった。時間通りに、粉ミルクを飲ませた。8月24日まで、すでに15缶ぐらいの森永粉ミルクを飲んだ。
実は、1955年6月から、岡山県の病院には、すでに赤ちゃんの奇病との説があった。また、患者である赤ちゃんはほとんど、みんな森永粉ミルクを飲んでいたことがわかった。不幸なことに、森永は発表する前、すでに22人の赤ちゃんは死んでしまった。

「当時はテレビもなかった。情報はほとんどラジオや新聞で流れた。両親は新聞に掲載された問題粉ミルクの製品番号をみて、我が家にある粉ミルクと一致していることがわかった。そして、すぐ森永に連絡し、私を入院させた。」小畑芳三さんは振り返った。
8か月の小畑芳三さんは病院で一歳の誕生日を迎えた。病院の診断によると、彼の肝臓は腫れたことが見つかった。
新聞から情報をつかんだ小畑芳三さんはラッキーだった。当時、辺鄙で、情報が流れにくい農村には、たくさんの被害者はまだすぐ事情がわからなかった。
事件後、森永は死亡した赤ちゃんの家族に慰謝金25万円、入院した赤ちゃんは1万円を渡した。また、被害者の家に行って、残した粉ミルクを回収し、森永のほかの製品を持っていった。「もちろん、私たちは食べなかった。捨てた。」小畑芳三さんは言った。
森永はこのような手段で事件を解決しようと思った。だが、赤ちゃんの両親らは心配しているのは、前代未聞のヒ素粉ミルクは、これから子供の成長にどのような影響を与えるのか。後遺症はあるのではないか。

**ヒ素ミルクを飲んだ赤ちゃん：14年間の暗い闇を体験**
被害者の両親は後遺症を心配する声がどんどん高くなった。当時の政府主管部門である厚生省は、専門家を選び、医療問題を担当する西沢委員会と賠償問題を担当する5人委員会を発足させ、被害者の診断基準と賠償方法を検討した。

表面上から見れば、公平な第3者調査組織に見えるが、実は活動費は企業協会である日本乳製品協会が負担した。森永の「注目」の中、二つの委員会はそれぞれの結果を出した。「特別な診断基準を定める必要はない」、「後遺症はない」との結論だった。
この結果をもって、森永は被害者家族の面談を拒否し続けた。「両親は何回も森永にいって、交渉しようと思った。だが、向こうは拒否した。」と 小畑さんは話した。

また、被告となった森永の担当者も、無罪だと言い渡された。
森永事件に詳しい東京大学元特別研究員中島貴子は取材をうけ、こう語った。「委員会の報告章の頭を読んで、結論は会社に偏るだろうとわかった。頭に、まず森永は事件発生後の迅速な救助姿勢を評価した。また、森永は日本乳業の発展への貢献も書かれた。」
「後遺症なし」との結論を出したのは医学界に権威のある専門家たちだから、この結論を広く信じられ、引用された。
森永粉ミルクを飲んで、全身に湿疹症状が出た、夜にほとんど寝られなかった天野さんは、小学校時代、両親と大阪付近の大きな病院をほとんど回した。彼女の症状は普通の湿疹と違うことが分かっても、医者さんは全員口を揃って、「ヒ素ミルクの後遺症ではない」と判断した。
ヒ素粉ミルクを飲んだ赤ちゃんはたくさんの病症が出たのに、専門家の「科学的な論断」に覆われた。その後、被害児の中、障害になった子、寝たきりになった子、普通に学校に通うことができるが実にヒ素に苦しまれた子がいた。彼らは闇の中に叫んでいたが、世間に聞かれなかった。

**ひかり協会：被害者に恒久救済を**

１９６９年に、大阪大学の丸山博教授は日本公衆衛生学会に「14年目の訪問」との調査結果を発表した。その発表によると、調査を受けた67人の被害児の中、50人は健康上、異常が生じた。ヒ素粉ミルクを飲んだ被害者は後遺症に苦しまれていることが明らかになった。
「長年を経て、被害児の現状はどんなっているのか。後遺症があるかないかに対する調査は、もっと徹底的にやるべきではないか」と丸山先生は主張した。この報告書は森永粉ミルク事件の被害児の苦境をみんなに知らせた。そして、メディアは被害者の現状を大きく取り上げた。
そして3年後、日本小児医学会は森永ヒ素粉ミルク調査特別委員会が最終報告をまとめ、後遺症あると発表した。また、被害児は「森永ヒ素粉ミルク中毒症候群」と定めた。1973年、裁判で森永徳島工場の製造課長に有罪判決を言い渡した。
被害者家族と森永の戦いはまだ続いている。家族は「森永粉ミルク中毒児童保護会」を組織させ、全国的に森永不買運動を展開した。各地で、森永を起訴するケースも増え続けた。森永の販売業績は下げり、会社は倒産の寸前だった。日本乳業大手企業は倒産してもらいたくないため、厚生省も積極的に介入した。
最終的に、「保護会」、厚生省と森永3者が協議を終え、森永は資金を出し、被害者に恒久救済するため「ひかり協会」を組織することを決めた。同時、各地の被害者の個人的な訴訟も停止した。その後、被害者の賠償要求を、ひかり協会を通して、企業を支給してもらうことになった。
ひかり協会に被害者も参加した。当時の重症赤ちゃん、今年53歳の小畑さんは現在ひかり協会の理事長に勤める。小畑さんは「日本の法律は、起訴側は証拠をだすと決められている。だが、普通の消費者にとって、とても難しいこと。ひかり協会を通して、恒久救済を得られる。」と語った。
1973年12月に、3者はひかり協会を設立させる確認書を出した。森永は「確認書」には、消費者に対する謝罪し、被害者への恒久救済の責任を負うことを明言した。中島先生は「ひかり協会の成立によって、企業は被害者に恒久救済するようになった。被害者家族らの長期的な努力の結果ともいえる」と評価した。
現在、ひかり協会は被害者に対して、健康相談、治療相談を行っている。また、被害者は森永に対する医療費の支給要求、年金の支給要求もひかり協会が仲介役を果たしている。協会が定めた基準によると、被害者は被害の程度によって、毎月6万円から7万円ぐらいの救助金がもらえる。今年の予算で、森永は被害者に17億円を支給する予定。ここ35年間、すでに410億円の救助金を出している。

日本政府は森永事件の教訓を生かし、1957年に食品衛生法を大幅に改定させた。食品添加物に関する規定を強化した。1960年後、「食品添加物法定書」も出版し、そこに乳製品添加物に対する新たな規定を定めた。

**森永教訓：企業はどれだけ生かしている？**

近年、森永とひかり協会は定期的な会談を設けて、被害者の状況を把握している。また、新しい品質管理体制を導入するとき、会社はひかり協会に報告する。今月末、ひかり協会のメンバーは森永工場に食品安全状況を視察する予定。

でも、天野さんは「私はその後、森永の商品を一切買わなくなった」と語った。被害者の信頼を取り戻すことは絶対容易なことではない。

天野さんは、30歳のとき、一度歩けなくなった。医者の診断によると、踵の骨の一部は、赤ちゃん時代は成長が既にとどまった。「これはヒ素粉ミルクの後遺症かもしれない」。その後、スポーツが大好きな天野さんは、スポーツをやめるしかなかった。

中島先生からみれば、ひかり協会は被害者救済にたくさん努力をしたが、まだ果たしていない約束もいくつかある。「たとえば、当時被害者に対する精密な調査をやると約束したが、私が知っている限り、実施されていない。また、被害者らに公務員のような待遇をするとの話があったが、結局ひかり協会に働く少数の軽度被害者はこの待遇をもらっている。はたして、これは公平なのか。」

「森永会社のたくさんの責任をまだ徹底的に追及されていない。また、ヒ素が含む工業化合物の処理に関する具体的な資料も公開していない。」と心配する声がある。

53年間以来、森永粉ミルクの教訓をどれだけ企業らが生かしているのか。「130人が死亡した企業は倒産していない。ほかの企業はこれをみて、やはり小さなミスを犯してもいいと思ってしまうのかもしれない。企業らは、食品安全管理面では、技術上、制度上に大きく改善したが、食品安全を追求するか利益の最大限を追求するか、あまり大きく変わっていないのではないか。」と中島先生は根本的な問題を指摘した。

森永ヒ素ミルク中毒事件資料館　トップページへ戻る
http://ww3.tiki.ne.jp/~jcn-o/hiso.htm